

人と、今次大戦で最も多い地区であった。私は二十六歳で召集され、台湾沖で、米軍の魚雷攻撃を受け、幸いにして死からまぬかれた。その後、フィリピンでも同様に死から免がれ、現在八十三歳でも健在で、恩給欠格者救済に努力していることは幸いであると思つてゐる。

北部ルソン（比島）

激闘の盟兵団

秋田県 田 口 隆 成

私は大正八（一九一九）年秋田県生まれ、昭和十五（一九四〇）年二月、歩兵第十七連隊留守隊入隊しました。同三月、満州第十七連隊へ移動。同十六年八月、奉天（瀋陽）陸軍予備士官学校を卒業しました。同十八年九月、弘前旅団司令部副官として勤務。同十九年六月、独立混成第五十六旅団（盟兵団）を編成、同月二十七日、宇品港出帆。同七月十五日、比島マニ

ラに上陸し、リンガエン湾正面に布陣しました。

以上が私の略歴ですが、戦場の第一線にいて、敵の上陸する真正面にいました。相手を殺さなければ自分が殺される。これが我々が真正面から対面した戦場の姿でした。命令されたことが正しいことだと私たちは信じました。敵も恐らくそう信じて凄惨な戦闘を繰り返した訳です。激突して幾度となく繰り返し返した。お互いに国を守り、私たちが国民を守るために、その戦場の真っ只中にいた訳です。

私は独混第五十六旅団（盟兵団）が編成されフィリピンへ行きました。その時は将校として私一人、下士官二人、兵隊が四、五人おりました。そして弘前の一個大隊、秋田の歩兵一個大隊、ほか野砲一個大隊、砲兵一個中隊、というようなもので編成された訳です。旅団長は水戸の連隊長をやっております佐藤大佐で、この方は山形の鶴岡出身でした。そして弘前に来られて、すぐ編成して弘前を発つたのです。要するに、その時の状況というものは、各大隊ごとに広島に

集結せよ、ということでご各個に出発しました。当時としては敵に情報を与えないということだったと思います。

この盟兵団というのは、ほとんど現役兵で、かつ日本の最後の現役兵ということで最強の兵器を装備しました。そして広島に集結、宇品から出港することになりました。宇品から出港しバシー海峡を通過中に一隻の輸送船が魚雷でやられました。そしてマニラ湾に入り上陸しました。その時の南方総軍の寺内さんがフィリピンにおりました。山下將軍はフィリピンでアメリカ軍を叩くことによって日本本土を防衛した方が良いと考えていたようです。

いずれにしても命令が出まして、もうレイテは駄目だということで、旅団の一個大隊、歩兵一個小隊、その他を連れて、弘前一個大隊が主体でレイテへ行ったのですが、玉砕して生存者は十人程度であった。終戦になってその十人程度の戦友が私の方の戦友会に来ておりますが、その中の一人はレイテでゲリラの捕虜になって、正に銃殺されようとした時にアメリカ兵が来

て助かり、終戦後還ってきたのです。レイテの玉砕にはこのようなことがありました。

十二月三十日には、私たち盟兵団は北サンフェルナンドへ行きました。そのころアメリカの船団が上陸、一月九日あたりから戦闘になりました。その時、そこへ入って来たアメリカの兵団は、空母一隻を主体とする五〇〇隻、人によっては八〇〇隻と言っておりますが、その時はすでに制空権、制海権はアメリカにありました。そして艦砲射撃がありました。艦砲射撃というのは爆撃なんというものではないのです。もう休みなしに連続に、凄いもので、山の形も変わる物凄いです。

私の兵力はだんだん増えてゆくのです。なぜかと言いますと、内地から送られてくる部隊が上陸しても目的地へ行けない、そういう兵たちが私の方へ配属になるので、最初八百人ぐらいたったのが千人になりました。ここで申し上げますが、編成時八百人であったのが戦死したのは千、三百三十八人という状況です。

フィリピンへ来た人たちが結局どのように戦い、どの部隊でどうのとうことは分かりません。アメリカが上陸して、夜アメリカ兵は天幕に入る、そこで枕元のアメリカ兵のものを取って、手榴弾を投げ込み帰ってくる。帰ってくる者はアメリカ兵のものを持って帰ってくる。昼はアメリカ軍に攻撃される。夜は日本軍の斬込隊が活躍する。この斬込隊は各大隊から尖兵将校を中心に行く。斬込隊が来るものだから、アメリカ軍は鉄線を張り犬を置くという状況になりました。ここでボイス・プライスというのが配属になりました。これは満州から来た部隊で、長は九州の方です。満州の要塞の三三センチの大砲四門を持って来ました。

これらはほとんど夜間の行動です。昼は駄目。飛行機が飛んで来て、飛行機の観測で弾着を修正して撃ってくる。私たちは幽霊飛行と言っておりましたが、一人でも動けば、そこへどんどん撃ってくる状態でした。いずれにしても言うに言われぬ戦場でした。大隊

の総員と戦没者をみますと、

盟兵団の本部	総員	一、一八八八	
	戦没者	五九六八	
吉田大隊	総員	一、五〇六八	
	戦没者	一、四一五八	
庄司部隊	総員	一、九一八八	
	戦没者	一、六三八八	
関部隊はレイテへ行きましたのではつきりしたことは分かりませんが、			
	総員	一、三六一八	
	戦没者	一、二八五八	
太田大隊	総員	一、七三二八	
	戦没者	一、五四〇八	
西村大隊	総員	一、四五三三	
	戦没者	一、三四七三	
金沢大隊	総員	七六〇八	
	戦没者	七三九八	
福永部隊	総員	九七四八	
	戦没者	八〇三八	砲兵
工兵隊	総員	四六八八	

戦没者	四〇七人	砲兵
総員	六七〇人	
戦没者	五六五人	砲兵
総員	一七四人	
戦没者	一五六人	砲兵
総員	七〇人	
戦没者	五四人	
総員	五三二人	
戦没者	三八九人	
総員	七九〇人	
戦没者	六〇一人	
名兵団のレイテ派遣隊も含めて、		
総員	一三、七九〇人	
戦没者	一一、四四五人	
生還	一、七八〇人	

という数字になっておりますが、これは本当かもし
れませんが、私はもっとたくさんだったように思いま
す。そして帰ってきてからマラリア、栄養失調、赤痢

などで相当の人が亡くなっているのが現状でありま
す。いずれにしても生還者は一割ぐらいだったなあと
思っております。戦争の第一線というものは大体こう
いう戦争をするもので、戦死者が多いものです。

「バターン半島死の行進」というのがありますが、
これは実際に大げさです。すでに調べた人が書いてい
るのには、要するにバターン半島を攻撃した時に、中
に残っている兵隊は非常に少ないと日本軍は見ていた
ようです。ところが、そこから出て来た敵は六万人い
たという。しかもフィリピン兵が第一線に出されて栄
養失調になって大変だったという。簡単に申します
と、バターン半島から收容所まで六〇キロあるそうで
す。その六〇キロを捕虜になった人が水筒一つ下げて
歩いた。日本の兵隊は鉄兜を被って軍装をして銃を
持って歩いた。平時の状態では一日約四〇キロ、一日
半という行程を六日間で收容所に着いた。ところが余
り捕虜が多くて、食糧がない、水がない、とくに日本
には車がないから歩かせたということです。当然マラ

リアに罹る人は倒れたということで、まして日本の兵隊さんは食べ物で十分でないけれども完全武装をして、これに付いて行ったから、日本兵も倒れたと思いますが、死の行軍ではなくてそうするか対応する方法がなかった、ということなのです。

私たちが捕虜で山から降りて来た場合は、米軍は天幕を張って下で待っていてくれた。すぐそこで寝かせてもらったのですが、パターンは急に落ちて、そこから六万という捕虜を引っ張って行っただけですから、対応が間に合わなかった。

自動車で運び、食糧を与えることができなかったというので、自分たちも食糧もないし、まして完全武装でしたから、捕虜だけを死の行進させたということではない、ということが真相のようです。あやまって日本軍が虐待して行軍させたのではないのです。

山下大将が、昭和二十一年十月九日に起訴された理由は「指揮下将兵の行動を統制する義務を怠った」という理由でした。山下大将の弁護を引き受けたクラ

ク大佐以下の弁護団は、あらゆる方面から無罪を主張した。しかし、わざわざ十二月八日の大詔奉戴日を判決日としたこの法廷は、文句なく山下大将に絞首刑を宣告したのである。この法廷はシンガポール戦の敗将パーシバル中将与コレヒドールの敗将ウェンライト中將も複雑な顔をして出席していた。勝利者が裁く軍事裁判は決して公平でもなければ、冷静な判断でも有り得る筈でもなかったのです。死刑執行日、昭和二十一年二月二十三日、刑場に行く自動車の中で、同伴していた僧侶の森田中尉が「遺言は」と尋ねると、「遺言の請訓は学校に通う前に我が家の母の手で作られる。自分の遺言は、人の教育を高めて良い母を作ること、これを祖国に望むだけだ。これを祖国に言ってくれ」と、そして静かに絞首台に上ったのです。

日本の司令官は人民の敵として絞首刑を受け、原爆を投下した米軍の司令官が人類の英雄になろうとは、戦勝国が敗戦国を裁くことは容易でないことである。戦場の中で日本の兵隊さんが戦犯として調べられてい

る中で、捕虜を虐待した住民を殺したということで死刑を受けた人は五千七百人ぐらいいると言われている。兵隊は戦争で殺していいのだけれども、無辜の住民は戦争では殺してはいけないと私は聞いている。それは国際法とか何とか言われていますが、アメリカは原爆で広島などで無辜の住民を何十万も殺している。とんでもない国際法に違反した行為だと私は思っております。

私たちはレイテ巡拝には一〇回位参っております。本当に戦場だけを巡るように心掛けております。それで昭和五十八年四月十一日に、私たちレイテ戦場の正面にあったアゴ市の海岸に慰霊碑を建てました。

「平和の碑」と中曽根さんが総理になった時に揮毫して頂いたものです。除幕式にフィリピンの観光大臣ご夫妻、市長などにご出席をお願いいたしました。建立した時に、青森から来た佐藤さんという方が、五〇歳近くの方ですが、谷間に向かって「オヤジ！ 迎えに来たぞ！」と叫びました。そしたら、そこにいた七

十人のひとが一斉に「ワー！」と叫びました。私は涙が出てたまらなかった。戦争は如何に本人・家族にまで影響を与えるものか、と本当に強く思いました。

それから京都の方は、自分の夫が、どこの部隊でどこへ行ったか二十年以上も探しても分からなかった。最後に盟兵団に行っているということで、私どものところへ参ったのですが、結局、海に沈んで、上がってきて、どこかの部隊へ配属になった。戦友というものがおられないから何も分からない、教えることもできないという現状もあります。

結局、山・谷へ骨を埋めて来たのですが、埋める時間があったかといえ、余りにも攻撃が激しくて、私たちは遺骨収集はできなかった。今もしております。

それと二、三年前に、部下が家族を連れて、ここに埋めたんだと行ってみたけれども、山容が変わっており、ついにそこには当たらなかった。要するに一千万の遺骨を収集するということは到底できないことだと思います。先程お話ししましたが、六十三万人がフィ

リピンにおり、その中で陸軍が一番多かった。航空、海軍は少なかった。五十万人が戦没している状況です。

平和というものは、大きい代償を払わなければ手にすることができないということです。現地で五〇回忌を、そして靖国で五〇回忌をしました。その時にはフィリピンのアゴ市の市長さんも来て下さいました。盟兵団とアゴというものは切っても切れない状態です。